素顔の神学生

東京神学大学では、キャンパスで学ぶ全ての学生が、召命を受け、伝道者になることをめざし、
共に切磋琢磨しています。個性あふれる学生たちも、伝道の熱意は同じ。
悩みながらも御言葉に向き合う、その素顔を紹介します。

● 教会に責任を持つ神学校

――数ある神学校の中からなぜ東京神学大学へ？

上山　学術的に高いレベルでアカデミックに学びたかったからです。一方で神学は、趣味や学問的知識を得るためのものではなく、教会に仕えるための学びだと受けとめています。もちろん、神学は学べば学ぶほど楽しいし、自由に議論すべきだとは思いますが、その“自由”は、教会から離れて好き勝手なことを言うのとは違うと思ってきました。アカデミックでありながら、教会に対して責任を持つ。そういう空気を求めていたので、東京神学大学に来て正解でした。

箕口　信仰を与えられたのは、大学院進学を志して貯金をしながらの社会人3年目。貯金も、これからの人生も主のために捧げようと、献身を決意しました。教会の牧師に相談したところ「フルタイムで勉強できるのであれば、東京神学大学がいい」と薦めてくださいました。入学前は真面目な“カタイ”人ばかりかと思っていましたが、実際には個性的で面白い人が多いです。なによりも、同じ志をもった仲間と祈り合えることがうれしいですね。

● プロテスタントの本流を学ぶ

栗山　私は独学で聖書を読み始め、その後教会に行こうと思い立ちました。母に相談したところ、所属するセブンスデーアドベンチスト教団の教会を紹介され、そこで初めて説教による福音に触れて「これだ！」と確信しました。すぐに牧師に相談しましたが、もちろん驚かれました。未受洗者が「一生をかける仕事が見つかった。牧師になる」と言うのですから。でも、理解して受け入れてくださり、神学校を選ぶときも「プロテスタントの中心的な教理を学びたい」という私の希望から、東京神学大学を薦めてくれました。

富山　私の父は本学の卒業生。ですから「伝道者になるなら東神大」と、他の選択肢は考えませんでした。父には「高校を出たばかりでは、厳しいぞ」と言われました。同世代の学生が少ないこと、また、人生経験が少ない中で神学と向き合う困難さも示唆していたのだと思いますが、それでも喜んでくれました。

● 頭に血が上るほどの熱い授業

――お薦めの授業を教えてください。

栗山　「組織神学Ⅰ、Ⅲ」です。私のときは近藤先生が担当されていたのですが、先生ご自身が「福音の真理の理解」に集中し、テーマに入りこんで語られます。その熱心さに聞く方も誘いこまれて、授業が終わると集中しすぎて頭に血が上って熱くなるほど。たまに鼻血が出てるんじゃないかと思ったぐらいです(笑)。実際に鼻血を出したことはありませんが、皆に聞いてもやはり、“熱くなる”と言いますね。

富山　1年生は入学して最初の授業が火曜日1時限の「キリスト教通論Ⅰ」です。これは、直接、世界的な神学者から神学の概論を聞くとても豊かな時間。私のときは、前学長の山内眞先生がご担当でしたが、少

上山 耕平
(うえやま こうへい)

— 大学院1年 —

【献身まで】 1984年生まれ。牧師家庭で育つ。自らの根拠を問う中で、また教会を問う中でキリストと出会う。自分の中にある“召し”への問いに答えられず迷っていた以前の大学在学時、教会の修養会で現学長の近藤勝彦教授と出会い「迷っている人は、すでに召されている」と言われて献身を決意。卒業後3年次に編入。